

# あそび 10

2009







蓄素守中 保多孝三著『柞廬印存』(一) より



昭和二十七年日展



『二十四詩品』の「飲眞茹強、蓄素守中」より。『二十四詩品』は晩唐の詩人・司空図（837～908）の著。「眞を飲（ふく）みて強を茹（はぐく）み、素を蓄えて中に守る」。昭和27年日展に出品作品と『柞廬印存』に収められてゐる作品とは少し違ふ。刻した年代が違ふのであろうか。比して日展作品は線が鋭いやうに思へる。

あを

十 月



朝顔の音

ガラスの海

本町三 佐藤喜孝

海中を乾いて泳ぐ鮫の肌  
黒鮪なぜかわらつて回遊す  
梅雨ふかしまんぼう片目あけて浮き  
大先光磯巾着は漢字好き  
翻車魚の動かぬと決め梅の雨

うら

裏抜けの恋文とどく五月かな  
裏窓にへばる天牛の髭  
麻裏をひっつけかけ駅の雑踏に  
梅雨さなか天井裏のねずみども  
今日明日日裏に揺るる猫じゃらし

鍋屋横丁 吉弘恭子

逃げ水

西浦和 渡邊友七

打つ手なき地震に脚垂れ蜂水へ  
奥嶺の日得てくろがねの葡萄垂る  
逃げ水は野に恍惚と置かれあり  
河童忌の虫籠つゝむ夜の蒼し  
蟬の眼の瑠璃色夜の爆心地

飛驒高山

清 瀨 赤座典子

秋雨に煙る家並み展望の湯  
雛に添ふ菊花真綿に包まれて  
落鮎の白子を当てに地酒酌む  
朝市や漬物桶に秋驟雨  
飛驒川の黒き秋水動かざり



硝子越しとかげと猫のむきあへる  
西瓜食む小言幸兵衛ひと休み  
手のひらの絵手紙もらふ夏の果  
蟬の真似烏のむくろあふむけに  
急がねばと声かけ合うて秋の蟬

聖蹟桜ヶ丘

安部里子



暑き日の銭湯ありて良き浮き世  
もう少し耐へる事あり黒日傘  
弁天堂蓮の浮き葉の上にある  
鬼百合や添木の金棒所在なし  
わが庭に朝顔血筋守りをり

曳

舟

遠藤

実



菜園にトマト炸裂敗戦日  
戦争中はと話し出す炎天下  
里帰り花火囲む子ひとり増え  
子燕の骸を抱いて子の泣ける  
描きかけの画架に夏帽かけて去る

逗子 鎌倉喜久恵

### 向日葵

夕立や唐三彩の馬嘶く  
夏草や搦手百葉箱隠す  
向日葵やゴッホの好みモネ好み  
菊馨る大佛蓮華座に  
奈良の秋今は思ひ出日吉館

川崎・小栗 木村茂登子





秋 暑 し 児 を 裏 返 す 掌  
夏 休 皿 の 数 だ け し あ わ せ が  
早 朝 の 地 震 そ の あ と 台 風 来  
安 楽 に と 云 ふ 階 段 に 残 暑 か な  
九 回 裏 ア ウ ト ひ と つ が 取 れ ぬ 夏

京 橋 篠 田 純 子



降 り 足 り し に ほ や か な 闇 涼 し か り  
お ほ よ そ の 小 錢 の 財 布 氷 菓 子  
桔 梗 や 淋 し く な れ ば 買 物 に  
水 引 の 花 や 出 無 精 筆 不 精  
未 明 に は 未 明 の 記 憶 水 羊 羹

千 駄 木 芝 尚 子



日に一輪日に一輪と扶桑花  
咲きつげるハイビスカスは朝の色  
昨日とは違ふ見方で白芙蓉  
お守を少年腰に夏休  
塩原の老舗の軒の赤トンボ

宝仙寺前  
芝宮須磨子

### ピアノの一部

川曲るところ立錐青真菰  
冷房やピアノの一部日がさして  
閑静な住宅街の花火屑  
今朝秋のポストの色が怪しからぬ  
ひきがへる流離譚みな貴重なりと

釧<sup>くまがさ</sup>地<sup>ぢ</sup>東<sup>ひだり</sup>出<sup>で</sup>

定<sup>じやう</sup>梶<sup>かぢ</sup>じよう



汗の子に古手拭の軟らかく  
松虫草浅間は未だ立ち入れず  
葡萄棚金峰山きんぶつは今日も雲捲けり  
二人きり無口になれば鉦叩き  
アメリカも日本も変革高き天

所 沢 須賀敏子

## 敗戦日

ふくらはぎ揉んで居るなり敗戦日  
青蚊帳を「燃えるゴミ」とし捨てにけり  
秋暑し換へねばならぬ非常食  
秋めくや塀の真下に猫落ちる  
鴉鳴きのよき日と思ふ昼寝覚

浦 和 竹内弘子

紅絹裏

田端 田中藤穂

青墨が形見となりぬ秋の旅  
紅絹裏は昭和で了るいわし雲  
裏木戸をおほひつくして灸花  
蝸やむかしの記憶くひちがふ  
大台風近づく夜の盧遮那佛

息災

三光坂 東亜未

新涼や白き二ノ細き腿  
落葉掃く夫小康の朝々に  
加齢てふことの息災夫の秋  
秋晴にシートを白くして貰ふ  
表と言ひ裏と名乗りて秋日和

揚羽蝶

富田長崎桂子

揚羽蝶 雨のあがりて立話  
揚羽蝶 付かず離れずわれとゐる  
水無月の中洲を隠す木曾三川  
かなかなや厨に地場産あれこれと  
湿舌にとりこまれたるきのうけふ  
早苗饗を前号正誤ぼそぼそと言ひ腰上げる

蝉

大宮早崎泰江

泰山木日ごと空蝉ふやしをり  
蝉殻のまだ柔らかき夜明かな  
雨の中鳴けるだけ鳴け油蝉  
終焉を知りてかせはし法師蝉  
約束の如八月十五日晴



分数ほめ朝顔日記手直しし  
硯洗ふ里芋の葉のつゆあそび  
硯洗ふ面相小筆ぬむごろに  
枝豆や手鍋をさげた夕心  
白衣の天使と言葉をなぞり夏終る

町屋藤野寿子



久に訪ふ夏野の道を違へけり  
畦道の行く手を阻む梅雨の雷  
風に揺る空蝉ひとつ琥珀色  
雨音の静まり俄蝉の声  
葛桜母の好みし皿にのせ

中井森山のりこ

不 忍 池

落 合 森 理 和

起き抜けの夢さめぬまま蓮の花  
朝すずし動かぬ亀の喉うごく  
走馬灯上野不忍肩車  
月明りそろそろ庭へ白鼻心  
不忍や仕懸け花火のナイアガラ

蚕糸の森公園

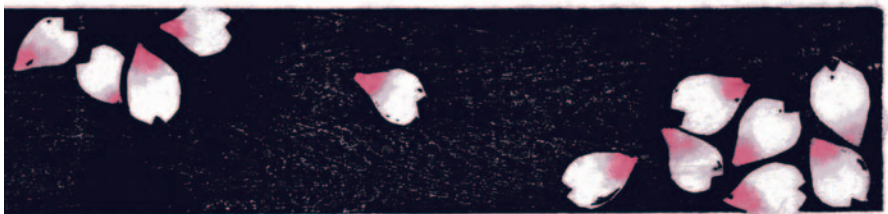
本 町 三 吉 成 美 代 子

木の間から見え隠れして曼珠沙華  
小流れに咲きこぼれたる乱れ萩  
大亀のゆっくり沈む九月かな  
ホームレス男の仰ぐ秋の空  
蚕糸の森名残の桑や秋暑し

人句

大川の波のかげほど盆の唄  
蓮見茶屋塀に乗りたる招き猫  
有刺鉄線ぬけて満開羽衣草  
歩く路消えてゆくなり油照  
梅雨茸や日々の見出しの虚仮威し  
髪洗ふすべてゆるせる心地して  
鹿の子百合と焼き立てのメロンパン  
何もせぬことを恐れず夏おくる  
咲きてこぼれ三丁目の角凌霄花  
熱帯夜赤子泣く声聞いてをり  
盆唄とこだまの出会い川のおひ  
降り足りしにほやかな闇涼しかり  
鮎を焼く夫の聞きたる瀬音あり

佐藤喜孝  
吉成美代子  
吉弘恭子  
渡邊友七  
赤座典子  
安部里子  
遠藤実  
鎌倉喜久恵  
木村茂登子  
斉藤裕子  
篠田純子  
芝尚子  
芝宮須磨子





## 前月作品

あんパンのへそと父の日係はりなし 片陰を伝ひて芭蕉稲荷かな それとなくわかる闇夜の月見草 仮の世の夕刊を読む太宰の忌 青蚊帳を仕舞ひつきりの天袋 打水の露地涉りくる銅鑼五点 早苗饗や盛りを過ぎし顔並ぶ 黒揚羽鴉一瞬たぢろげり 夏休ロボット研究目きらきら 朝夕の水を掴みて母の夏 日蝕の夏の木漏れ日月形に ガラス窓骨の音立て黒揚羽 引き出しに臍の緒ひとつ合歡の花	須賀敏子 鈴木多枝子 竹内弘子 田中藤穂 東 亜 未 長崎桂子 早崎泰江 藤野寿子 堀内 一 郎 森山のりこ 森 理 和 山莊慶子
--	--

喜孝抄



## 九月作品より

王岩・佐藤喜孝

### 金魚行く波紋の影に速さあり

斉藤裕子

金魚の原産地は中国で、長江下流域の浙江省近辺が発祥の地とされている。室町時代に中国から日本に伝来し、江戸時代に大々的に金魚の養殖が始まった。金魚には約55の品種がある。

掲句は素早く泳いでいる金魚の姿を波紋の影で捉えている。

### しつかりと筆持つ子供天の川

芝 尚子

何か願い事を書こうと筆をしつかりと握って一生懸命に考えているように見える子供、天の川に向かっていているその姿は愛しい。

### 花芙蓉ひと日限りを咲き誇り

芝宮須磨子

『和漢朗詠集』には白居易の詩句「松樹千年終是

朽、槿花一日自為榮」が載せてある。木芙蓉も槿花のように一日花を開く。一日の短い花期を誇りかに精一杯に咲き誇る木芙蓉は美しい。

### 十薬の香の濃き夕べ裏通り

鈴木多枝子

黄昏時の裏通り、何処かの家から生薬を煮る香りが濃く漂ってくる。市井生活の一齣を活写する句作である。

### 盆唄が隅田の川面流れ行く

須賀敏子

日が暮れてから、盆踊りの歌声が賑やかに聞こえてくる。赤々と点っている提灯は隅田川を照らしている。音楽は隅田川を越えて暗夜の彼方へ消えていった。隅田川の畔の盆踊であろう。(以上王岩)

### 蓮見茶屋堀に乗りたる招き猫

吉成美代子

蓮見茶屋とは季節限定の簡易な造りの茶屋であらう。上野不忍の池畔には昨年あたりから江戸のお茶

屋をイメージした「蓮見茶屋」が夏季営業を始めた。そこで「招き猫」が塀の上に乗つてゐるのを発見。属目吟の目の付け所が面白い。

### 梅雨茸や日々の見出しの虚仮威し

赤座典子

新聞の見出し、またはテレビ欄の見出しでもいい。毎日、これでもかと辟易するまがましい見出しを目にする。どうでもよい内容の正に虚仮威しである。食へない梅雨茸は世を憂ふる作者には、ピツタリと心に添ふ季語である。

### 何もせぬことを恐れず夏おくる

鎌倉喜久恵

強い意志の句である。体調の不調を感じたのかも知れないが、ひと夏何もしないのは易いが、そのことを「恐れず」は強い人である。「夏終る」ではなく「おくる」にも時の流れに唯々諾々と流されずそれを制御してゐるかのやうにも思へる。主体は我にありである。

### 仮の世の夕刊を読む太宰の忌

竹内弘子

赤座典子さんの句もさうだが、この句も社会といふものに一線を引いた位置に立つ。齢のゆゑであらうか。新聞を読んでもなぜか自分事のやうに思へないのである。それでもやはり朝夕刊を購読することになる。新聞を読まなければ読まないでまた不安な心地がする。夕刊に太宰忌の記事が載つてみたとかといふ句意ではない。太宰は弘子さんの青春期につながる作者なのであらうか。「仮の世」といふ大胆な措辞が嫌味なくつかはれてゐる。(以上喜孝)



# 近世俳諧と漢詩文

24

王岩

武陽旅亭之吟

東籬にとらず、南山を見ず

皆買うて揃へる菊のやどりかな

淡々

『淡々発句集』に収められた句である。句題で分かるように武陽の旅籠屋で詠んだものである。例の陶淵明の「採菊東籬下、悠然見南山」を逆手に採って、淡々は皆買うて揃える菊の旅籠屋の様子を描いた。

気力ます雨は療治の柳哉

田中直治

『時勢粧』に見える田中直治の句である。白居易の七絶「府西池」の起句「柳無力氣枝先動」の表現をそのままに生かした貞門俳人たちの作品が多い中で、田中の句はその表現を逆手に取って受容した作例である。あの白居易の詠まれた「氣力の無い柳」は、春雨に潤われてまるで治療を受けたかのように見る見る氣力を増すばかり。

「淡々文集」より

かけ物にそむきてむかふ花の顔  
交りもかたゞ稲の香深みどり  
虎の脚汐に濡れずや桃の花  
蚊は絶て波を枕ぞ菊の月  
矩を踰す越るや法の花衣  
よしの山世界の花は飲くらひ



# あをかき集 堀内一郎選

(六人目以降五十音順)

芝 尚子

香水の男子生徒とすれ違ふ  
実梅もぐ葉ごしの空の蒼さかな  
この夏も何となく遣り過しけり

天然水買ふ世となりぬ終戦日

晩夏光今更世辞のいらぬ仲

白黒と梅雨もをはりの喧騒は

繙きし白井喬二の富士に雪

軒下の燕も去にし白露かな

白墨でへのへのもへじ始業式

夏休腕白どもの道となる

赤ちゃんに笑ひかけらる秋日和

隣人の大きな嚏今朝の秋

香の強し待合室の秋扇

強き地震一人居の夜生姜湯

芋嵐出足の速き投票日

玄関に大き靴あり夏休

軽やかに朝顔の白ひらくなり

ついて来る猫の鈴音夏の月

白シャツと眼鏡浅沼稻次郎

飛ぶものがとぶものを追ふ今朝の秋

白衣の女医に涼しき胸を触れらるる

細胞内の死の灰死なず夏の空

露草や女の情の裏の裏

凌霄花のまつ盛りなる団子茶屋

手を上げて別る晩夏の改札口

美しき人の孤独死花水

蕎麦食べて忘れてきたる夏帽子

うなぎ飯女の寿命また伸びる

篠田 純子

田中 藤穂

吉弘 恭子

赤座 典子

早崎 泰江

投票場夾竹桃の紅淡し

秋夕日白熱戦の選挙カー

朝刊の束の間匂ふ震災忌

鯨日和夫婦ちぐはぐ予定表

色紙買ひ雨畑硯洗ひけり

オカリナは癒しの音色夏の月

たどたどしピアノの調べ梅雨じめり

銀行の庇を借りる燕の巣

子燕の又一斉に口を開け

腕に来て翅を下げきる赤とんぼ

波崩れ歓声歓喜真桑瓜

白煙に滝の迸り赤とんぼ

白樺林に群るる白嫁菜

秋の蚊の押し寄せて来る森の中

グラウンドに虹現るる散水器

何かある尾長騒がし森の秋

秋寂し煙草をねだるホームレス

シャボン玉迷ひきて割れ盛夏果つ

藤野 寿子

森山のりこ

森 理和

吉成美代子

渡邊 友七

泣きやまぬ児よ矢車は目にいたし

蜻蛉の曼荼羅神の石睡る

蓮の華ひらく未明の音一つ

老鶯や銃後の守りと言ひし頃

征きしまま水盃で六十四年

蚊の羽音B♭の記憶あり

頂点の好きな蜻蛉に覚醒剤

物思ひするもの憂き暑さかな

己むを得ぬ一人ぐらしの夏を病む

一本のたうもろこしを持ってあまし

団扇持つ手に血管の青く浮く

流灯の一つ明りの消えしまま

願ひごとみなまで聴かぬ流れ星

精一杯生きて晩年醉芙蓉

石垣の崩れしままに蝉しぐれ

女郎花地主不在の庭で咲き

瀬音して白浪高く夏惜む

青空を桃色に染め百日紅

遠藤 実

鎌倉喜久恵

木村茂登子

芝宮須磨子

渋滞の高速道の夾竹桃

人生は冒険といふヨットの帆

八月に集ひて鶴を折る日あり

日曜日一人黙禱長崎忌

この国の変はる兆しや星の秋

女先生ゐるので神輿荒れて見す

飯籠るいま日蝕の厨にて

遠泳の底ひだんだん恐くなり

山を曳き出さんとばかり蟻の列

天日干焼鰯頭骨野蚕に食ふ

杖の人その父に似し秋初め

西瓜切る手元を見張る目の六つ

孫の留守小さな茄子を挽がずをく

何と無く笑ふ年頃秋櫻

夜濯と言ふ教へ心かけてをり

使用済地球の熱に水を打つ

七十の血もたかる蚊やうらめしき

夏木立明治を残す門構へ

須賀 敏子

定梶じょう

東 前号正誤 未

長崎 桂子

田中 藤穂

## 一句燦々

白シャツと眼鏡浅沼稻次郎

純子

白シャツで夏のイメージは十分。このたびの選挙で自民党は大敗し民主党に政権は移った。九月十六日に鳩山首相誕生、少々不安ながら期待して止まな。集中目を奪ったこの一句大いに政変に憂いを込めているようだ。

私が演説を聞いたのは薬王寺の商店街の軒先だった。恰幅のよい姿で、この作は当時を思い出させる。残念なことに昭和四十九年に右翼の少年に暗殺された。当時浅沼代議士は六十二才であった。姓名判断では、上から下まで偏と旁が割れているから、つまり分裂、遭難を意味する。



凌霄花のまつ盛りなる団子茶屋

藤穂

艶麗な、のうぜんと昔風の団子茶屋が目をそそる。明るさと暗さになつかしさも甦るのであろう。「花より団子」もそれとなく愛用して好調と思う。美人薄命を嘆きつつ蕎麦や、うなぎに気配りは万全。俗に言うなら色気より食い気、羨ましい。

香水の男子生徒とすれ違ふ

尚子

女子なら当然だが、男子生徒で、ハツとさせる。世の移り変わりなのである。昔なら軟弱と罵られたもの。男も身嗜みが必要な世の中になった。鳩山首相のキチンとしたこと。それに引きかえ若者、碌なものを着ていない。先ずは身嗜みが大切ということか。

白黒と梅雨をはりの喧騒は

恭子

黒白は、よしあし。色々のことがあった。その騒

ぎは当分続くようである。選挙による政権交代、酒井法子のこと、クレヨンしんちゃんの白井義人氏の荒船山遭難死。継ぎからつぎへが、この世の慣いなのか。「富士に雪」の安泰の日が欲しい。

赤ちゃんに笑ひかけらる秋日和

典子

赤んぼに泣かれるのが多いが、愛敬をもらうとは、良い心持ちではある。吸収した明るさは、作者にもエネルギーを与え天高しの感、この子の家庭も笑いに充ちたおゝらかな一家。ぎくしゃくした世だから尚更掬いに。

玄関に大き靴あり夏休

秦江

靴が想像させる。若い人であろうし、身内かも。奥の部屋から声も聞こえてきそう。帰省子ともうかがえる。作者の弾みが伝わる。

秋夕日白熱戦の選挙カー

寿子

けじめはついたが、皆一生懸命だった。いまは嘘のように静まりかえった町。兵どもが夢のあとと言ふべし。「色紙買ひ雨畑硯洗ひけり」の雨畑は私の父母の故郷。山梨県の南巨摩郡雨畑石。

オカリナは癒しの音色夏の月 のりこ

戦時中何もなかったとき、楽器店にオカリナだけ残っていて、吹いたものだ。あの空しい音色が少年の心を癒してくれた。

腕に来て翅を下げる赤とんぼ 理和

余程好かれたようだ。自然を愛する作者ととんぼとの交流。良い奴か悪い奴かはわかるらしく、山で熊に襲われた人もいる。

秋寂し煙草をねたるホームレス 美代子

そういうことに出合うことがあるのだろうか。女性だからかも知れない。作者はその出来事に対し恐

怖感、嫌悪感ではなく秋の寂しさを感じた。やさしい心の俳句である。

シャボン玉迷ひきて割れ盛夏果つ 友七

風が左右するのだがシャボン玉の行方は確かに迷うかに見える。やがて自分に重なって夏が爆ぜてゆく。空しさ、あつけなさ。

老鶯や銃後の守りと言ひし頃 実

時代を知るものは、身につまされる。老鶯は女性にも通じ、内容のきびしさを解しているようだ。「言ひし頃」として拈がりは果てしもない。

考えて見ると銃後の人々が敗戦国復興にも寄与し現在があることも忘れてはなるまい。

物思ひするもの憂き暑さかな 喜久恵

思わず口を突いて出た呟き。暑き日を思い起す。心細く体調を気遣っているが、「一本のとうもろこ

しを持ってあまし」と、とうもろこしにご執心は天晴れである。

流灯の一つ明りの消えしまま

茂登子

一連に淋しさが漂う。消してはならぬ自身の灯であが、「精一杯生きて晩年酔芙蓉」と、晩年に一花の意気込みは羨しい。

女郎花地主不在の庭で咲き

須磨子

近所でも、この風景が増えている。地価が下がった空地はそのまま、女郎花が秋を告げている。

人生は冒険といふヨットの帆

敏子

思えば来し方は冒険だった。ヨットの帆の行方は運命であろう。逆わずヨットの帆。

女先生ゐるので神興荒れて見す

じょう

ごあいさつで男先生ではさもないが、連中の意気

が大いに上がる。御神体もその気になる。

男先生では色気なし。女先生で祭が盛り上がる。このオーバーな表現が俳諧をそそる。

私の処、東京女子医大なので女医先生が往来。

「飯籠るいま日蝕の厨にて」の「飯籠る」と「日蝕」は妖しさが魅力。

天日干焼鰻頭骨野蛮に食ふ

東亜未

外見であり自身かも知れず。力強いものへの憧れではある。お姿からは察せられぬ展開で下五はストレス解消につながる。

何と無く笑ふ年頃秋櫻

桂子

対象は女性で初々しさから妙齢まで、女性ならではの目で捉えた。秋桜のつつましさ新鮮さが羞恥の笑みを讃える。

# 御旅所の巻

御旅所の濡れて残りぬ国道に

屋台の上に移りきし月

重陽の茶会に友を誘ひて

でかけてきますと走書あり

泣いてゐる幼をあやす膝の上

隣の猫がきてのぞきたる

竹簾吊したままに夏の来し

庭石の陰石菖の青

和服着てたれかを待つてゐるらしく

浅瀬仇波号外が出る

紅灯の巷わが町てふむかし

人も泡沫刻もうたかた

初雪のちよんとのりたる笹の上

冬月に寄り星のまたたく

駅弁の紐をまるめて日本海

置忘れたるポストンバッグ

起き抜けにはじめてひと日花の酒

おぼろと思ふ銭湯帰り

起首 二〇〇八年十月二日 於中野坂上「ジヨナサン」

竹洗

糸つ

唐網

不寝

糸つ

波

竹洗

糸つ

波

竹洗

糸つ

波

竹洗

音々

糸つ

不寝

竹洗

音々



下駄はいて十二単にかがみこむ

うしろすがたのふと美登利かと

堆し父の書齋の謡本

あかり引き寄せ針仕事する

金蚤かなばねがとび込んでくる縁の端

西日ぐらぐら山に入りゆく

早くから畠仕事や老夫婦

夜は子犬と川の字に寝る

呼ばれれば水に漬けをく箸茶碗

手づくり野菜市へ出荷す

月照らす榎の大樹を通り過ぎ

次の宿まで歩をのばす虫

諏訪の湖漣立ちて秋惜しむ

クラス会へと杖ついて行く

ハモニカで小鮎釣りしはかの川と

今亡き兄の声の懐かし

愉しげな花の上野のホームレス

烏雀も囀のうち

糸つ

もも

唐網

糸つ

もも

唐網

糸つ

波

竹洗

唐網

波

竹洗

唐網

波

竹洗

唐網

波

竹洗

満尾 二〇〇九年八月九日 於中野坂上「ジヨナサン」



# あを柳集

兼題 白

佐藤喜孝 選

白玉を冷やして誰を待へとなく

せびしらの銀漢白くながく垂る

夏の空すこし離れて白小雲

しらぞ

せつきから道迷ひぬる白日傘

白玉を冷やして誰を待つとなく

出題によつて作りやすい、作句意欲が涌く、又はその反対があるやうです。今回は前回より少し出句数が増え出題者としてほつとしてゐます。

母はお盆のころになるとちらし寿司や白玉を作つて居ました。仏壇にお線香を上げに来る人もてなしでした。掲句の誰を待つとなくもどこかうきうきしてゐる自分を諷めてゐる感がして読者を惹きつけます。

さびしらの銀漢白くながく垂る

「さびしらの」は私にはむづかしい言葉でした。形容動詞で「ら」は接尾語と辞書にあります。さびしらは銀漢にかかるやうでもありますが、切つて読みました。「白く」「ながく」「垂る」と感情の増幅を読者に刻み込んでゆきます。「さびしい」といふ使ひにくい言葉を抵抗感なく読ませます。

夏の空すこし離れて白小雲

「白小雲」は見なれない言葉でした。空の中に雲が浮いてゐるのですが、空と雲の位置をしつかり見て書きとめたのが面白く思ひました。類想のありさうな句ですが、私は広い世の中に同じやうに感じる人がゐるのかと嬉しくなるタイプです。もちろん先行句には敬意を表します。

さつきから道迷ひゐる白日傘

白日傘の人が作者ではなく、その様子を作者は見えてゐるのでせう。たまたま目にしたことを書きとめたのですが、「迷ひゐる」と言い切ることでをかしまみを誘ひます。（総出句数 六十四句）  
「白」の名句あまたありますが、芭蕉の句を少し書き抜きました。

家はみな杖に白髪の墓参り	葱白く洗ひたてたる寒さ哉
花にうき世我が酒白し飯黒し	梅白し昨日や鶴を盗まれし
海暮れて鴨の声ほのかに白し	白芥子に羽もぐ蝶の形見哉
月白き師走は子路が寢覚哉	白菊の目に立てて見る塵もなし
曙や白魚白きこと一寸	白髪抜く枕の下やきりぎりす
水仙や白き障子のとも移り	白露もこぼさぬ萩のうねり哉
石山の石より白し秋の風	面白うてやがて悲しき鶉舟かな
藻にすだく白魚や取らば消えぬべき	面白し雪にやならん冬の雨

第六回 「飯」 十一月×切 用紙（原稿用紙）・句数自由 送付先 あを発行所





白うちはかな文字で書く千代女の句

藤野 寿子

新豆腐先づ白あへを供へけり

表情の時折白く生身魂

篠田 純子

白玉を冷やして誰を待つとなく

竹内 弘子

転生の白茸かも竹林に

片陰や白木の塔婆かかへゆく

初秋や牛蒡の葉裏まつ白に

父の辺へ母遣りしこと白木槿

大白雨出口に人の寄り合へる

東 亜 未

白きものばかり土用の物干竿

定樞じょう

白きこと二百十日の浮燈台

さびしらの銀漢白くながく垂る

眞白な開襟シャツの高校生

長崎 桂子



白玉の不揃ひはさて冷え加減

木村茂登子

白南風やすつきりのびる木々の先

吉弘 恭子

梅雨あがる白太に釘の跡ふたつ

月の夜白面で出づ路地の奥

白粥にチヨモランマの塩ひとつまみ

夏の空すこし離れて白小雲

白秋生家鴨居の低き夏の午後

田中 藤穂

少年に密約のあり白い夏野

さつきから道迷ひぬる白日傘

白濁の極めはそば湯ちちろ虫

森 理和

古本の余白に日付こぼれ萩

一本の白樺たずね花野行く

幸せは追ふものでなし梅白し

佐藤 喜孝



白人になりたき人に龜の鳴く

飛行船紋白蝶を撒いてゐる

飛花落花白詰草の花ざかり

白藤の白を過ぎたる色となり

透明と白とのあはひ短夜の

水は一氣に白湯はゆるくむくげ垣

ほの白くのびる二の腕みだれ萩

白鳥の千羽乗りたる池の面

白聖紀にさびしい人の足跡が

海賊船

海賊船揺れに任せる鴨の群

森 理和

夏の湖海賊船に乗込みり

森山のりこ

秋の唇芦ノ湖渡る海賊船

安部 里子

貝塚

縄文の貝塚守る冬木立

早崎 泰江

貝塚の不死身のごとく芽吹きけり

早崎 泰江

貝塚の太古は海ぞ枯木立

早崎 泰江

伊皿子の貝塚遺跡水澄める

東 亜 未

貝塚に木枯の音たしかめる

早崎 泰江

貝塚に貝の殻見る青嵐

早崎 泰江

貝塚の枯木くまなく夕映ゆる

早崎 泰江

海底

海底へいまも散りあるさくらかな

佐藤 喜孝

海底の砂のいろもて石鱗

竹内 弘子

毒水母海底埋む温暖化

芝 尚子

回転

鉄棒や青葉の天地回転す

田中 藤穂

父の日やいつもの回転木馬かな

遠藤 実

開店

暖炉燃ゆ今日開店のレストラン

芝 尚子

釣忍かかげ和菓子屋開店す

赤座 典子

開店のコンビニの混む秋の昼

田中 藤穂

街道

暮れ泥む青梅街道夕時雨

芝宮須磨子

旧街道お大師さんへ冬うらら

木村茂登子

山ふじや裏街道へ遠廻り

森山のりこ

枯薄眦におき木曾街道

吉弘 恭子

短日や然らでも雨の旧街道

竹内 弘子

小夜更けし川越街道地虫鳴く

赤座 典子

街道の軒低き家冬に入る

田中 藤穂

画家

夭折の画家したはしき蛇莓

竹内 弘子

向日葵を好みし画家の若く逝く

早崎 泰江

八月の句会

傳 中野区 カフェ傳

秋暑し換へねばならぬ非常食  
 白壁を右往左往とさな葛  
 閃光は少女を白く夏の雲  
 夏霧の深さを計る石礫  
 日曜日一人黙禱長崎忌  
 背後より猫の鈴音夏の月  
 うなぎ飯女の寿命また伸びる  
 おほよその小銭の財布氷菓子  
 飛ぶものがとぶものを追ふ今朝の秋  
 実を食めば風の香りの古代蓮  
 蓮池のなかほどざわざわしてをりぬ

あを吟行会  
 上野蓮見

蓮の花ひらききりしがやや傾く  
 濁り池を埋める蓮の清らなり  
 子規山人らしきいがくり汗を拭く  
 蓮高し桜の枝に突き当る  
 ついと来て蓮の露のむ雀の子  
 蓮の葉動かぬ亀の喉動く  
 散りさうで風待つ気配蓮の花  
 蓮咲いてふぐ塚糸塚扇塚  
 三脚をぐつと伸ばして蓮の花

弘子 恭子 理和 喜孝 純子 弘子 典子 美代子  
 綾子 敦子 純子 尚子 藤穂 泰江 敏子 喜孝 理和 恭子 弘子

風出づる蓮の葉裏のフラメンコ  
 不忍の丘をなしたり蓮の華  
 蓮開くあの世たのしきことあらむ  
 喜久恵 綾子 裕子

調句会 浦和岸町公民館

朝の風ささやき交すねこじやらし  
 白玉を冷やして誰を待つとなく  
 流星に祈る言葉の軽からず  
 踏切のあかりの中に浴衣の子  
 手を上げて別る晩夏の改札口  
 約束のごとく八月十五日晴  
 軽やかに柴又遊山暑氣払ひ  
 蓮池のほのと匂へり扇塚

ほくと  
 七座句会 中野区・小川苑

秋風に裏のありけり墨を磨る  
 桔梗や淋しくなれば買物に  
 お守りを少年腰に夏休  
 秋立つ日着物がたのここちよき  
 裏山の蛸のこゑ観世音  
 路地裏の猫良い顔の夕涼み  
 ポケットの裏がとび出る櫛の実  
 みんみんもかなかな毛いてバスを待つ  
 紅裏は昭和で磨るいわし雲  
 秋蝉の夕べ逢へずに帰るなり  
 時々波裏返る麦の秋  
 抜け裏の床几に置かる将棋盤

慶子 弘子 敦子 喜孝 藤穂 夏子 東亜未 綾子 房代 須磨子 尚子 木枯  
 綾子 寿子 泰江 藤穂 喜孝 敦子 弘子 慶子 慶子 弘子 敦子 喜孝 藤穂 夏子 東亜未 綾子 房代 須磨子 尚子 木枯

連句勉強会 毎月第2日曜  
 出席希望の方は連絡を  
 (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜  
 カフェ傳 森 理和  
 (03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜  
 岸町公民館 竹内弘子  
 (0488-86-3501)

あを吟行会  
 詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜  
 小川苑 吉弘恭子  
 (090-9839-3943)

## あを吟行会のお知らせ

場 所 神田川散策 1

中野坂上～中野新橋

集 合 地 丸ノ内線「中野坂上」

日 時 11月21日(土) 午前11時

句 会 場 「じよあ」焼肉店

申 込 み 〆 切 11月18日

申 込 先 佐藤喜孝 09098284244

駅↓成願寺(約650年前、中野長者 鈴木九郎が、出家し開創した寺)↓神田川↓中野新橋(貴乃花部屋前を素通り) 福寿院(人頭蛇身の弁天様)↓青梅街道↓句会場

表紙の写真は一年前の当月に撮ったものを使用している。今月は総持寺の百間廊下。茂登子さんに案内されて珍しいところを拝観し、精進料理を戴きました。そのあとのゆつくりとした句会は思い出に遺るものがあります。それがもう一年経ったとは、改めて驚きです。いま茂登子さんは療養に専心してをられます。暖かくなりましたら金沢文庫へ一緒に秋日和の中で考へてみます。

ご芳志多謝

藤野寿子 様

二〇〇九年十月号

発行日 九月三十日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電 話 090・9828・4244

佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト

竹徳房

カット/恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

郵便振替 00130・655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。